

リハビリテーションにおける「ほどよい距離」のもつ意味

- 精神障害を抱える人の〈居場所〉の考察から -

千葉女子専門学校 関谷 眞澄 (006535)

[キーワード] 居場所 ほどよい距離 レスポンシビリティ

1. 研究目的

筆者は平成22年度淑徳大学博士論文において研究目的のひとつとして、精神障害を抱えながら生活し生きていくその支えとなる力とは何かを、精神障害を抱える人とのライフストーリーインタビューから考察した。そのなかで、〈居場所〉が障害を抱えながら生活し生きていくのを支える要因のひとつとして明確になった。精神障害を抱える人にとっての〈居場所〉とは、「身の危険を感じず、他者の目を気にしないで(どのようにみられるか不安にならないで)、心身ともに安心していられる場所」「精神障害者であるという負い目を感じないでいられる場所」であり、こころとからだがりラックスできる「安全・安心感」の空間である。それは他者との関係性に支えられた「安心」「安全」の空間であり、そのためには他者とのかかわりにおいて「ほどよい距離」が重要であることを述べた。ここでいう「ほどよい距離」とは、他者との関係性における「あいだのあるつながり」を意味する。

本発表では〈居場所〉における他者とのかかわりの「ほどよい距離」と、援助者のかかわりにおける「ほどよい距離」について考察を深めたい。博士論文での知見をもとに「ほどよい距離」の持つ意味に焦点をあて、Aさんの語りを中心に新たに分析、考察を試みる。

2. 研究の視点および方法

筆者は博士論文で精神障害を抱え地域で生活している方々にライフストーリーインタビューを行った。今回グループホームに入居しているAさんの語りを中心に採り上げ、〈居場所〉とそこでの他者との「ほどよい距離」について分析、考察し、リハビリテーションにおける援助者との「ほどよい距離」を「レスポンシビリティ」との関連で考えたい。

ライフストーリーインタビューを採択したのは、ライフストーリーに着目したことと、調査協力者の飾りのない声を聴き取りたいと考えたからである。語り手の声をその人の側に立ち理解しようとするなら、その人生に目を向けその背景を理解しようとする視点と方法が必要である。人ができごとをどのように感じ取り意味づけていくかは、いままでの体験と将来への志向に影響を受ける。人生の文脈が変わればできごとの意味も異なる。語られた内容を事実の羅列として終わらせないためにもライフストーリーへの着目が重要である。それは語り手の「体験時間」と「生きられた空間」への理解となる。また語り手の独自の表現やニュアンスには声にできない感情や立場が隠されている。そこを感じ取るには、語り手に厳密な表現力を要求せず、その人独特の言い回しを受けとめ、その語りのままに聴き入り、語り手の経験を文脈のなかで捉えようとする方法が適している。

3. 倫理的配慮

インタビューへの研究協力の依頼は、研究の目的、話せる範囲のことで構わないこと、インタビューを途中で中止することもできること、プライバシーの厳守などについて伝え、録音の許可を依頼し、了解を得たうえで同意書をいただいた。今回の発表の調査協力者はグループホーム入居者であり、世話人さんの援助を受けている。発表の主旨と内容を関係者に伝え、発表が調査協力者や関係者にとって支障がないか相談し了解をいただいた。

4. 研究結果

プライバシーの保護のためインタビューの状況、Aさんの概要やグループホームの状況などについては、口頭での説明とする。入居のきっかけから語りが始まり、現在の生活について「何もない日は大体ここ（居間）にいる。テレビもあまり好きじゃないし、本も読まないからここでぼけーっとしてる。（そうしてると）ここ居間だから誰かしら通りかかる。話相手（と）まで（は）いかないけど、通ってるとこ見れば、なんて言うのかな、安心感って言うのかな、なんか安心する。ここで番人している。生活はぎりぎりだけど居心地はいい。」と語っている。人の姿が見え、ちょっとしたやり取りがあり、また姿が消えていくといった空間が、Aさんにとって無理なく身を置ける〈居場所〉、安心してくつろげる場であることが読み取れる。人の「気配」という「ほどよい距離」のもたらす「安心感」である。同じグループホームの入居者であるBさんは、支援センターで仲間と麻雀をすることが精神衛生上いいと語った。集団生活でのストレスが馬鹿話しながら麻雀仲間と過ごす時間でリフレッシュされるという。つかず離れずの「ほどよい距離」でつながる麻雀仲間のいる支援センターは、Bさんにとって「ほどよい距離」に包まれた〈居場所〉であろう。

生活空間たる場所で、他者とのかかわりを「ほどよい距離」を保ちながら感じていられるようにその場所がなっていくこと、その時にその空間は精神障害を抱える人にとって、物理的にも心理的にも「安全・安心感」のある〈居場所〉となる。そして援助者はかかわる相手にとっての「ほどよい距離」を見誤ることなく、尊重していく姿勢を持つことが重要であり、それがその人の「安全・安心感」を損なわないことにつながるのである。

精神障害に限らず、障害を抱えた人がその人の選んだ姿で生活していく力を引き出すことがリハビリテーションの役割であろう。それは「レスポンシビリティを引き出す」ということでもある。「レスポンシビリティ」とは相手の呼びかけに応じられる用意があることであり、呼びかけや促しに応じる「責任」が「レスポンシビリティ」である、と鷲田は述べている（註1）。鷲田のいう意味での「レスポンシビリティ」とは「他者とかかわる力」といえよう。その力は援助者との関係性に「ほどよい距離」がなければ引き出されない。「ほどよい距離」を保つには援助者に「待つ」「見守る」姿勢が必要である。そのことをこころに留め援助していくことが、障害を抱えた人の主体性を尊重したかかわりにつながる。

（註1）2009年 鷲田清一 日本臨床心理士資格認定協会主催 第14回学校臨床心理士全国研修会における講演「受け身の作法 <聴く>ことと<待つ>こと」による。